

名犬作りとは！

夢と現実の 狭間で……

神奈川県

田宮

治



◎虹の橋

猟人というより人間誰もが、この狭間で躓き苦しむのである。仮にこの事を「子犬発」―「名犬行き」の路線上で考えてみると、「夢」と「現実」の間には大きな『虹の橋』があるようだ。

どうしても越えられない難所であり、剣ヶ峰で「猪犬」あるいは「名犬」への登竜門といえる。秘策を練り、英断に基づき、挑戦し続けて見事この橋を渡りきった者＝猪犬が、「勝者」であり「名犬」である。当然の事であるが、どんなに努力しても天運に恵まれずに矢折れ・弾尽きて、この橋を前に涙した者が敗者である。

人生に於いても「夢は最高の目標」であり、それを「現実のものにする事」にこそ「究極の喜び」があり、「最大の意義」があると思うのだ。たかが猪犬作りといってみても、それを「最高の目標」である「名犬」にまでもってゆくとなると、並みの努力や挑戦心で出来る事ではない。

「子犬を作る」のも「育てる」のも、そして夢の猪犬、つまり「名犬に仕上げる」にも血のにじむよ

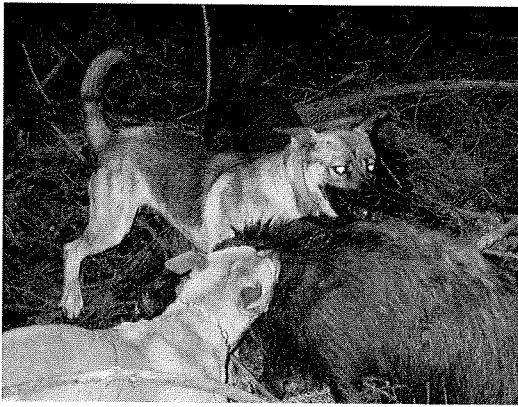


千葉の猪獵場

うな努力とこだわりをもって、事にあたり、やり遂げなければならぬのだ。

猪犬作りに挑戦し続ける中で、誰もが必ずその先に「虹の橋」を見る事であろうし、それに突き当たり思い知らされるはずである。子犬を手塩に掛けて育て、「つなひき」ではじまり、その行動範囲を教え込み、主人の意志伝達・命令などをきちっと教え諭した上で、ようやく山入りさせ、実戦訓練となるのであるが、これらの事は大筋で前記の通りである。

この橋をなんとか渡らせる為に、



山猪との攻防。じっと戦況を見守る事である。上のハヤト号は1歳で大猪と戦い死亡。下のブル号(2代目)は素晴らしい猪犬に成長



ブル号とハヤト号(戦死)。不運にも大猪との出会いで、守ってやれず、あたら1歳の若い命を...



小物を確実に噛みこませれば、これ位(110Kg位)までなら難なく撃ち取れる。ブル号、ヨシ号、マ口号、サクラ号、全て1.3歳までの若犬

獵人ならばみなそれぞれの考えに基づき、精いっぱい努力はしているはずであるが、若犬のこの時期の訓練こそが、猪犬として名犬に登りつめる段階で「紙一重」が問題になる、極めて難しい訓練なのである。

そしてこの時期の訓練は「獵人の経験」と「頑張り」、そしてなによりも大切なのは「どんな猪でも撃ちとる技術」であり、「猪がまだ動いている温かいうちに、思いきり噛ませてやる」そんな事なのである。ほんの少しの手違いや悪運が重なる事で、期待の若犬から先に落ちこぼれて行くようなもの

で、やって来た者でない、この無念さはとても理解して頂けないと思うのである。

◎自分が納得出来るまで

あくまで俺流であるが、この時期の若犬をすんなりと、この橋を渡らせるような極めつけの特効薬などあるはずもない。基本的には「自分の猪獵法」で「自分に合った猪犬作り」である。自分が猪獵に使って、「その一芸を見ているだけで楽しくなるような...」、そして「自分」と「愛犬との力」で「どんな荒猪でも撃ちとれる猪獵犬に仕上げる事」だと思ふのである。

1年目でどんどん猪に咬みこみ、これを撃ちとる事で「追いこみ」とか「半矢の回収」まで覚えた若犬は、めきめきと力をつけ、その鳴き声も一段と迫力あるものになり、1軍なみの実力を肌で感じるものである。

そんな若犬は、年齢を重ねるにつれ、必ず名犬となって「納得出来る猪獵」と「その醍醐味」を味わわせてくれるはずである。あせらずに繰り返し繰り返し、1つ1つを「丹念に・正確に」教える事、つまり具体的にはあくまでも「実践の場」で「体験を重ねさせる事」により、若犬の「獵能を一杯引

き出し」、「磨き」、「咲かせる」事が目的であり重要な課題なのである。願わくは愛犬と共に見事この「虹の橋」を渡りたいものである。どんなに「優れた逸材である」と言っただけで、犬でしかない。まだまだあどけない若犬である事を常に念頭において何事を教えるに当たっても「繰り返し、繰り返し返し」やる事が基本である。

自分が納得出来るまで「確実に実践する事」で、その「若犬に合う一芸」を叩き込み覚えてもらう事なのである。

◎無事これ名犬(名馬)なり

すばらしい

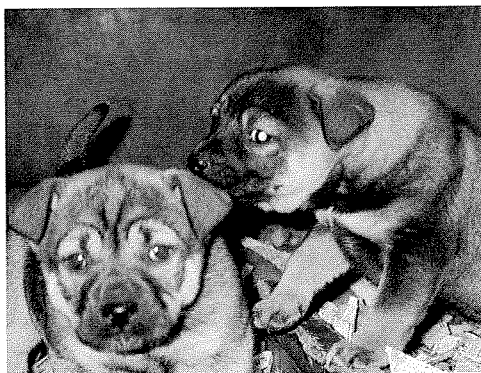
狩能で、実戦を重ねるたびにどんどん猪に咬みこんで「これは凄いいぞ!!」とうならせる様な若犬は「ぜひとも名犬に:」と期待して獵人も若犬も調子を上げ、意気込んでどんどんとハードルを上げて行く。



獵人は全力で撃ち取って思いきり咬ませてやる事が大切。若犬は富士美号1歳

ただこの時期の獵人の心得は、決して「無理をせず、目指す猪も60kg位まで」とし、猪の足跡もそんなものを探して「追い落とす場所」や「撃ち込む場所」まであらかじめ想定しなくてはならない。運良く「60kg位までの猪」に愛犬が付いて、咬みに入ったら焦らずに「咬み倒す」まで「いつでも撃ち込める(とどめを刺せる)態勢」で、「若犬の動作をきちっと見る事」であり「守る事」なのである。そうすれば、めぐり来た好機が生かされ、若犬にとって2倍いや3倍の訓練になるのである。

基本的には「子猪位は逃してやりましょうや:」ではあるのだが、



来獵期に期待の子犬(もう一流の咬み?)

この時期に大切な事は「若犬を守って育てる」事であり、「欠かせない獵心」なのである。

◎夢の橋を渡らせるために

単独獵での猪犬作りは奥が深く、誰にでも出来る程たやすいものではない。「猪の習性を熟知」した上で「獵場を知り」「若犬のその時期の実力を知る」事で策をめぐらす。「撃つ技術」も「若犬を教え導く技術」も簡単に思い込みがちであるのだが、並みの努力や挑戦心では、成果の出る世界ではない。なんでもかんでもが「全て自力であり」「その獵人の実力が物を言う」まったなしの真劍勝負な

のである。「何言っただか!」と思われそうだが、全ては「名犬にする」為のものである。また何としても、元氣な若犬を「虹の橋を渡らせる」為には、最低でもこの位の獵心は欲しいものである。



實力は既に1軍のヨシ号

そんな主人のもとで仕上げられる若犬でも前述のように「勝ち戦続きでは要注意」なのである。実戦の場、つまり山では何が起こるか計り知れないのである。突然出合ったのが、予想だにしない大猪だったらなんとする?咬み一番の素晴らしい若犬ほど、大猪に裂かれるのである。

猪との攻防の中で、若犬の動きをよく見て欲しい。というのも猪に対した時「一直線」に「顔面めがけて咬み込む」のが、私は一番先行き楽しめる「咬み一番犬である」と思っているからだ。さらに

大切な一芸は「足の関節に咬み込む」事である。

これらの特性を犬群の中でもきちっと見極め、「バックを作った」とか「コンビ犬」を組んだりするのであるが、必ず猪とのその時々、攻防芸を見極めた上で、生かして使う事に行っている。

若犬時は1頭の猪を撃ち取る度に、めきめきと驚くほど力をつけるもので、「撃ち取る前」と「撃ち取った後」では、全く別犬のように成長するものである。勝ち戦績きでは「猪の恐ろしさ」を知らず「行け行けどんどん」という事にもなりかねない。残念で仕方ない事であるが、若犬は「良い犬からやられる」ようなものである。「これは必ず名犬になる」、そんな若犬は3歳位までが要注意なのである。主人は命を掛けて守ってやる「勇気」が何よりも必要な事だと思ふのである。

若犬はその自信で成長し、その後何年も主人を楽しませてくれるのである。

反対に無線へ入る「大物の声」は絶対にこれを侮ってはいけないのである。基本的に犬と猪では、猪が強いに決まっている。ただの一突きで若犬は終わりである。こけようが息切れしようが、目指すは止めの現場である。1秒でも早く撃ち止める事である。

当然の事、どんな時でも「犬を守る為」であるから、念には念を入れ「物の確認」「犬達の確認」そして何よりも「自身を守る為」に必ず「上の方から」「鳴き声を頼りに、寄る事」なのである。若犬時で犬群に力の無い場合は、鳴きつかれると「猪は必ず上に登り、トコトコと頂上を(高い方を)目指すもの」で、そんな事からも「上から近寄るのが理想」である。

そして若犬の為に少し遠くからでも木に銃を添えて撃ち込むようにする事も忘れないで欲しい。これは「若犬にやさしい撃ち方」で、取り返しのつかない「ガンシヤイ」にしない為である。ちなみに「犬群の力」が出来上り、強い場合、猪は谷か低い方に、必ず落ちるも

のである。

◎夢を現実に

こんな事は常識なのであるが、実戦の場で突きつけられる現実は何事においても想像を遥かに超える苦難ばかりである。実戦の場で、誰もが突き当たる現実には真に「紙一重の判断」であり「とっさの判断」である。「敏速」に、そして慌てず正確な対応が要求されるのである。獵人のこんな心得が、この

の先に夢もつながるのであり「夢を現実にする事」、つまり「虹の橋」も難なく渡りきれぬだろうし、「夢の名犬」だって見事出来るはずである。

基本的には猪の単独獵で、1人でも簡単に撃ちとれる程の名犬などは容易く出来るものではない。これまでやってきて言える事は、なかなか出来ないからこそ夢であり、名犬なのだ。それで良いではないか。



130Kg牝猪と私